

## 勘違い

菅田 忠志

「はい 差し入れしてあげるわ」「サンキュー。この次には一緒に行きたいね」。渡された小箱を小脇にはさみ、列車に乗り込む。

独身男性3人のクラブ仲間が計画したスキーツアーの出発を、送ってくれた女性部員からの差し入れだった。

差し入れといえば通常山で荷物にならないよう、往路の車中で飲む酒のさかなのたぐいが多く、今回もそのつもりであけてみた。

ところが、そのようなものではなさそうだ。ウィスキーボンボンと呼ばれるチョコレートだった。

「これで酒は飲めんなあ」「まあチョコレートは行動食にいいから山でいただこうや」

そのときのスキーツアーは、天候もイマイチとなり、途中何度も立ち止まり、地図と磁石でコースの

- 1 -

確認をとりながら進むが、いかんせん、視界のきかないことが行動を極端に遅らせ、途中、吹雪の中の野宿を強いられてしまった。

ささやかな食事を終えたころ、ひとりが「あれ？今日はバレンタインデーやで。昼に食ったチョコレート」と言い出した。するともう一人が「あ、あみんなで食ってしもって」と付け加えたが、「まさか」と言っしかなかった。

数日後、出社した彼女と会ったとき、「この前の差し入れは」と聞いてみたところ、「さあね お誕生日だったでしょ」

あれから30余年、いまだにあればバレンタインチョコだったのか、誕生日プレゼントだかわからぬまま、毎年2月14日には女房となった彼女からチョコレートをもらっている。

まさかわしい日に生まれたものだ。あの差し入れのチョコは勘違いだったのかなあ…。

- 2 -